



2009.4月号

編集・発行／リプロネットみやぎ

CONTENTS

- 10周年記念セミナーを終えて
- 報告

2月15日開催「リプロネットみやぎ設立10周年セミナー」を終えて

「リプロネットの活動」への熱い期待が寄せられた日が過ぎて…」

リプロネットみやぎ副代表 村口 喜代

私はリプロネットみやぎの副代表として、「今後のリプロの活動をどのようにやっていくのか」非常な迷いの中で、10周年記念セミナーへの取り組みを開始しました。最近の会の活動の停滞から、いかに新たな流れをつくることができるか、全ては会が終った時におのずと回答が見えてくるだろうと腹を決めました。「みやぎの女性、からだと性のホンネ！ 100名に聞きました」の企画に取り組みながらも、みんな来てくれるだろうかの気持ちをずっと引きずっていました。

セミナーは当初の予想を超えて112名とたくさんの方に参加していただき、7割は会員外の一般参加で、20代から70代まで各年代に及び、学生、会社員、公務員、主婦…様々な立場の方まで、少數ながら男性の方にも参加していただきました。ホッとすると共に久しぶりに高揚した気持ちになりました。回収された65名のアンケートの結果、大変良かった70.8%、まあまあ良かった23.1%で、セミナーは本当に大成功でした。今後のリプロの活動へ期待することでは「女性が女性を見つめなおす機会にぜひこれからも参加したいと思いました。友人にもつなげていきたいと思うので、これからも積極的開催を楽しみにしています」「“性”と“命”が乖離している現在をどのように改善していくのでしょうか。現在の問題点をどんどんあぶりだして欲しいと思います」「今回の調査結果、大変貴重なものだと思います。会場からの声にもありましたが、男性のホンネもぜひ聞いてみたいです。」「やはりリプロの問題は男性を巻き込んでいかないと広がらないし多くの人々の共通認識にはならないと思う」「日本の性教育は改めて問題意識が低いことを実感した。」「特にリプロに対するバッシングが強い中、この分野において停滞・後退を感じます。大切な活動団体です。ぜひこれからも根気強い活動を期待します」…たくさんの共感、コメント、期待と励ましが綴られており、今後のリプロの活動に確かな示唆をいただきました。

今回のセミナーを振り返り今思うことは、

●リプロネットみやぎにはたくさんのすばらしい、貴重な得がたい人材がいることを再確認できましたこと。

忙しい皆さんがこのセミナーに集中し、それぞれができる形で最大限の力を出すことができました。

とてもすばらしいことです。

●会場の参加者と一体になって会が進行し、

熱気に溢れ、真剣な話し合いが時間を忘れて展開できたと感じられたことです。

●私たちは性を持ち、この社会・この時代を生きて行く限り、

リプロの活動の重要性はいまさら言うまでもないこと、そのことを改めて実感できました。

迷ってはいられない、やるつきがない、今そんな気持ちを噛み締めています。相手を守っていて、性暴力の被害者には、相手を訴える権利が自分にあること、性暴力加害者には、あなたがしたことは、犯罪であり、人権侵害だと話します。両者も、初めて知ったと言います。“ライツ”がないと自分の身体や心は守れないのです。デー

「リプロネットみやぎ 10周年記念セミナー」記録（要約）

■基調講演「リプロの原点ーあなた、今幸せ？」

講師：リプロネットみやぎ代表 長池博子



リプロダクティブ・ヘルス／ライツの提唱しているのは、男性も女性も共に不安のない性生活を送ることができる権利、女性が妊娠・出産について自分で責任を持って決めるができる権利、そして自己決定するために必要な知識を得ることができる権利です。このことから私たちはこれまで、女性が生涯にわたって健康で不安のない性生活を送るために必要な様々な知識を普及する活動を通して、リプロ・ヘルス／ライツの理念が皆様に直接届くよう努めてきました。

しかし、パートナーとなる男性の性の知識も十分ではありません。私は特に思春期の男子には、女性の妊娠についての知識、性感染症の加害者にならないための予防教育＝責任教育などを通して、いわゆる性教育にとどまらない、自分とパートナーとのコミュニケーションスキルを身につける教育が必要だと考えます。

ワークライフバランスについても、女性が妊娠・出産・育児・親の介護などを抱えながら働いていくためには、男性の働き方を過重でないバランスの取れたものに整備することが必要です。昨今の経済恐慌の中にあっては、男性社会がかつての競争的思考に逆戻りしないかと懸念されます。法的には男女雇用機会均等法、育児休業法、男女共同参画社会基本法など女性政策の基盤整備はなされつつありますが、真に女性の意思が反映されるような男女共同参画の社会を作るためには、女性の雇用機会や所得などが男性と同様の社会的地位を保証されなければなりません。

こうした催しにも、ぜひ男性の方にも多く参加していただきたい。そして、私どもリプロネットの活動の趣旨をご理解いただいて、女性も男性も一緒に、パートナーと共に幸せだと思うような社会にしていきたいと願っております。

■トーク＆トーク「知りたい 聞きたい 自分のからだと性」

村口 喜代（産婦人科医・リプロネットみやぎ副代表）

アンケートに協力してくれた方は、未婚者ではジェンダーなどについて学ぶ機会がある学生が多く、既婚者についても健康保健などの専門職の方にお願いしたという経緯もあり、宮城の一般的な女性というより、かなり意識の高い女性的回答が集まったと感じます。

結婚前の性行動は非常に活発ですが、結婚後は少なくなることはつきりました。セックスレスは男女の関係性の問題です。性を夫婦の基本的な柱として立てられない社会、性を語り合うことなく、男女がともに性的に自立していない社会が面々とつながり、今日まで続いていると思われます。今、人間同士のコミュニケーションスキルが後退している、そうした関係性を作れない社会になりつつあることを感じます。今回の結果からも、求めているのに、育てようとしてもなかなか相手がついてこないという姿が浮き彫りになりました。セックスレスの問題も、少子化の問題も、私たちが「関係性」という大きなテーマに向き合い、展望できる何か手がかりをつかんでいかないと、なかなか歴止めがかかると思います。

そうした中で、私たちができる事はなんだろうと考えます。答えはまだ見えていませんが、すぐにできることがあるとすれば、こうした会に参加してくれる女性の方の半分でもパートナーを連れてきてください。それで何かが少し違ってくると思います。私たちは相手を見ながら、相手と話しながらでしか先は見えません。次回はよろしくよろしくお願ひいたします。



福島かずえ（仙台市議会議員）

2002年にいわゆるバッカラッシュ、ジェンダーバッシングが全国的に高まり、仙台市の男女共同参画の条例づくりも危機的状況になりました。現在は、男性の保守系議員でも女性の人権については真っ向から否定することはなくなりましたが、ジェンダーやリプロ・ライツについてはまだまだ理解されていません。特に性の問題については非常に遅れていて、閉ざされたテーマです。女性の側にもまだ男性を主体とした意識があるようです。バッキング以後、性については、教育現場だけでなく、大人を対象とした生涯学習などでも非常に取り上げにくくなりました。自分の身体への疑問・关心をもつ市民の学習の場が少なくさせられていることは、とても問題だと思っています。



バッキングで男女平等の社会づくりを揺り戻す人たちの目的は、自分の人権や自分の人生において自己決定する権利を主張する女はつくらないということです。女性の人権が守られないということは、男性の人権も本當には守られないということです。議会や国会でのジェンダーバッシングは、社会の問題を個々の関係、個別の問題にすり替えています。そうではなく、この問題をもっと社会全体でとらえ、男も女も一人一人の人権や自己決定権がきちんと守られる社会づくりについて、みんなで話し合い、考え方をつくるなどの動きが非常に重要です。性成熟というのは発展していくものです。いくつになっても、形はいろいろあっても、パートナーがいて、快感

があって、生まれて良かった、人生っていいなと、男女共に思えるような社会をつくっていくために頑張りたいと思っています。

北村志津枝（仙台市立中学校養護教員）

バッキングが起きてから（性教育の内容は）学習指導要領で制約され、とてもやりづらい状況です。中学1年生では数時間程度、2年生はほとんど手付かずで、3年生でやっと、高校生になる前に中絶と感染症について伝えるというのが現状です。性については発達段階に合わせて毎年繰り返し学習していかないと自分のものにはならないと思っています

「寝た子を起こす」、性教育を語る時によく聞く言葉です。でもよくわからないうちに妊娠し、中絶する女の子は決して少なくないのです。私たちがめざす性教育は、いわゆるコンドーム学習ではなく、科学に基づいた人権であり、自立と共生の教育がかみ合った本来の性の学習だということを知ってほしいと思います。

私は、自立共生ということからも、自分の身体ってとっても素敵だと教えます。発達段階をきちんと踏まえて、そうした自己肯定感を高める授業を積み重ねていくことによって、自分の身体を大事にでき、きちんと NOと言える子に育っていくのではないか、子どもたちがもっともっと感性を取り戻せるのではないかと思います。

子どもたちには身体について学習する権利があると思います。日本はそれを保証していません。ポルノでしか学べない非常に貧困な状態にあります。男の子も女の子も、身体は一人一人みんな違います。家庭や学校、社会で素敵なパートナーとの関係を学び、子どもたちが将来、二人で育てていくという気持ちで豊かなセクシャリティを築いていってほしいと願っています。

八幡 悅子（ハーティ仙台代表）

データからは、結婚するとセックスが減って、疲れた夫と言い出せない妻という姿が見えます。DVや離婚の相談を受けていると、「日本では、結婚により法的・経済的縛は保証されますが、情緒的縛と性的縛は恋人時代だけで、結婚すると希薄である」と思うことがあります。男性の買春行為も女性の相談に多いので、「男性はなにに疲れているの」とも思います。

私は、性暴力について話します。それはとてもとても深く心をえぐることです。相談を受けていて、性暴力の被害者には、相手を訴える権利が自分にあること、性暴力加害者には、あなたがしたことは、犯罪であり、人権侵害だと話します。両者も、初めて知ったと言います。“ライツ”がないと自分の身体や心は守れないのです。デー

トDVの相談で、相談する若い子たちが増えています。早く気づく、それが大事です。傷ついても手当ができない事や、社会が無理解なことが問題です。中・高校生や大学生に、性暴力やDVだけではなく、男女の快感についても話してきました。子どもたちは興味いっぱい、とても学びたいのです。山ほどの質問をぶつけてきます。「科学的にしっかりと教えれば、子どもたちはこんなにきちんと学ぶじゃないか」と言いたいです。一番大事なのは男女平等、人権教育です。学校の管理職は、性教育バッシングに神経を尖らせていますが、子どもたちに本当のことを伝えたいと思っている教師や親は、たくさんいます。その事に希望を感じています。男性も女性も性を楽しめるような科学的な情報は必要です。性の電話相談の7割は男の子たちからでした。あふれるポルノ情報に踊らされて、根拠のないコンプレックスを持たされています。男の子たちには、同性である男性がきちんと対応してほしいと思っています。

〈コーディネーター〉 郡 和子 (衆議院議員)

教育の現場でジェンダーバッシングの矛先が向いたのが「ラブ＆ボディ」という(性教育の)副読本でした。国会でもこの議論には、厳しい意見が多いのが現状です。性に対するあるいは家族の関係性に対する大人の搖らぎみたいなものが、そのまま子どもにも影響を与えるのでしょうか。心配になります。

イギリスの大手コンドームメーカーが夫婦のセックスの回数を調査しています。2004年にはフランスがトップで1年間に137回、以下ギリシャ、イギリス、セルビア、スペインと続き、いずれも100回を越えています。日本は断トツの最下位で1年間に46回です。この数字を見ると、少子化に歯止めがかからないのも頷けます。

リプロヘルス／ライツの問題には、子どもたちへの教育、家族やカップルなどの関係性の問題だけでなく、例

えば雇用や家族政策の問題なども関係してくるので、複合的な視点で対策を立てていかなくてはなりません。日本は家族政策予算がとても少なく、国はもっと考えるべきだと思います。

今回、セクシャルライツについてこれだけ直に多くの声を聞けたということは、大変意義があったことでした。これまで偏見や恥じらいの中でなかなか大きな声で語れない領域でしたが、これを社会化させていくという新たな道を皆さんと共に切り開いていきたいと思います。男女それぞれが対等に、そして皆さんも子どもたちも、よりよい豊かな幸せを感じられるような人生を送るように、今後ともリプロの活動に対して、ご理解をいただきたいとお願いを申し上げます。



【通常総会のご案内】

以下の日程で2009年度の通常総会を開催いたします。出欠の確認と会費納入につきましては、あらためてお知らせいたします。総会終了後に会員研修会を開催いたします。たくさんの会員の皆様のご参加をお待ちいたします。

(日 時) 2009年6月4日(木) 18:30開始
(会 場) エルパーク／スタジオホール
(会員研修会) 19:00～ (一般公開 無料)
(テマ) 「子宮がん—最近の話題—(仮称)」
(講 師) 東岩井久先生(仙台市立病院名誉院長)

編集後記

10周年セミナーが終了してから、早2ヶ月…桜の咲く季節となりました。当日は、リプロネットみやぎの今後の課題も見え、とても有意義な時間となりました。大変遅くなりましたが、当日の盛り上がりを皆様にお届けいたします。今後ともリプロネットみやぎを、どうぞよろしくお願ひいたします。(事務局)